

## 『世間親仁形氣』〈祝言〉の方法

——「老を楽しむ果報親父」の『文正草子』利用をめぐつて——

濱田泰彦

はじめに、

二、「老を楽しむ果報親父」における『文正草子』利用

二一、「老を楽しむ果報親父」梗概

二二、娘の誕生をめぐつて

二三、『武道伝来記』の剽窃と逆転劇

二四、又兵衛の「親仁形氣」

三、浮世草子における『文正草子』の利用

おわりに、

江島其磧『世間親仁形氣』最終章段「老を楽しむ果報親父」（巻五ノ三）は、主人公中腕の又兵衛の一人娘おきくが家老と結婚することにより、日雇い人足から屋敷住まいへと急激な身分上昇を伴う話である。当該章段には、娘蓮華姫の婚姻により殿上人に出世する文太を主人公とする『文正草子』の祝言的展開が関与していると考えられる。ただし、「老を楽しむ果報親父」のおきくは『文正草子』の姉妹のような器量良しではなく、将来への期待も極めて希薄であり、祝言的結末は予期され難ったが、奉公先の家老との間に男子を授かったことにより、状況が一変する。その場面では西鶴『武道伝来記』「毒薬は箱入の命」における酷似した状況描写を巧みに剽窃している。このほか、子宝に恵まれない役割を娘の両親から娘婿に変更したり、又兵衛が高家の生活に馴染めないといった障害を挿入する等、種々の操作を行った上で、『文正草子』の祝言が実現したのである。

## はじめに、

草子類の最終話あるいは結末部は、祝言で閉じるという不文律がある。一般に短編のみで構成される浮世草子作品の場合、最終話をハッピー・エンドで結ばなければならぬ拘束のために、ストーリー展開が凡庸になりがちなのを作家たちは否応なく意識させられ、何がしかの工夫を加えることにより、それを回避するよう心掛けなければならなかったと推察される。

論者はかつて、井原西鶴『武家義理物語』（貞享五・一六八八年二月刊）最終話「形の花とは前髪の時」<sup>〔一〕</sup>（巻六ノ四）の創作方法を読み解いたことがある。当該章段は、木村長門守の召使であった松尾小膳に鳴野宇右衛門と玉水茂兵衛の二人の侍が心を寄せ、小膳・宇右衛門の二人の親密さを疑った茂兵衛が小膳に果し合いを申し出るストーリーが軸に展開されている。茂兵衛によれば、自分の方が先に小膳に心を寄せたにもかかわらず、後で執心した宇右衛門と密会するとは堪忍なり難く、こうなったら討ち果たすしか他に手はない、とその事情を述べる。痴話喧嘩のもつれとはいえ、命を懸けた果し合いに及び、幸福な結末などおよそ想定できない状況に追い込まれる。ところが、西鶴はこの緊張のピークをあつけなく緩めてしまう。かねてより

小膳は生国石見に杉山市左衛門なる念友を残しており、他の侍と契ることはありえなかった（当該章段冒頭にその旨明記されている）。果し合い直前にそれを知った茂兵衛は、「宇右衛門と御懇ろあそばさねば、この方に何の恨みもなし」<sup>〔二〕</sup>と、それを辞退する旨やや唐突に通告し、三人は「義理一遍の語らひ」をなすに至り、大団円を迎える。旧稿では、小膳と市左衛門が各々、当時荒木与次兵衛座に抱えられていた若衆役者松本小膳と杉山勘左衛門をモデルとしており、役者同士のスキヤンダルが関与しているのではないかと推定した。それはさておき、西鶴が平板な展開を避け、極めて深刻な事態を設定した上で、「千歳の春を重ね、末々武の家栄え、太刀抜かずして治まる、時津国久しき」<sup>〔三〕</sup>とおさだまりの祝言におさめる落差の大きさに工夫をみとめることができるだろう。

西鶴以降の浮世草子作者もまた、最終話祝言の原則を遵守することとなる。作品内容や趣向に心血を注がなければならない作者にとって、最終章段の執筆は、二重に負荷のかかるところであり、且つ腕の見せ所でもあっただろう。

次章以降、その実例として江島其磧『世間親仁形氣』（享保五・一七二〇年正月刊）最終話「老を樂しむ果報親父」<sup>〔四〕</sup>（巻五ノ三）における『文正草子』利用を確認し、もって、浮世草子における最終話（祝言章段）創作手法の一

端を明らかにすることを試みる。

## 二、「老を楽しむ果報親父」における『文正草子』利用

### 二一、「老を楽しむ果報親父」梗概

『浮世親仁形気』『老を楽しむ果報親父』（巻五ノ三）の梗概は以下の通り。

日雇い人足で生計を立てている金杉（現・東京都港区芝）の中腕の又兵衛には、妾奉公にも出せない程度のあまり器量の良くない一人娘おきくがあった。十三歳でさる大名の家老の屋敷に奉公に出されたおきくは野菊と名を改め、奥様の御意に入る。十年余が経過して、その奥様が死亡し、気落ちした家老を慰めようと美女を寄せ集めてみたものの、少しも心移すことはなかった。十月の亥子の晩、酒宴の後で釣灯籠を外すよう家老が命じたところ、野菊がその役目を負った。家老は野菊の姿が何となく好ましく映り、ついには子を授かる。四十余にして家老が初めて授かった子には幸若丸の名が与えられ、跡目として大切に育てられる。さて、野菊が正式に奥様として披露されたのに伴い、沼田瀬平が命を受け、金杉の野菊の家族は家老の屋敷に招待される。ところが、中腕の又兵衛には御屋敷での優雅な生活が肌に合わず、家中のもてなしを嫌い、

夜はそつと部屋を抜け出て庭に筵を敷いて裸で眠るという有様であった。そこで慰めにと千本突の工事を依頼すると、又兵衛は黒塗りに高蒔絵の地築棒を持って喜んで働いた。こうして、又兵衛は百歳まで健康に家老の屋敷で幸せな生涯を送ったのであった。

『浮世親仁形気』（以下、『親仁形気』と略記）序文は「一変りかはりたる、親仁どもの形気を」、「五冊に集め」たと記す。巻五ノ三でも例に洩れず、日雇い人足以外の生活を拒絶し、せっかくの屋敷での贅沢な生活をこごとく嫌悪する中腕の又兵衛という「一変りかはりたる、親仁」に焦点が当てられている。と同時に、娘の婚姻に伴い、それまでの生活から一変して家老屋敷での不自由のない生活を中腕一家が享受する変化に富んだストーリーこそが当該章段の眼目にもなっている。

娘の婚姻によって、主人公の身分が急激に上昇する展開は、明らかに塩屋の文太（文正常岡）の娘連華姫と中将が結婚し、殿上に招かれる『文正草子』の利用を予想させる。ただし、「老を楽しむ果報親父」（以下、「老を楽しむ」と略記）における『文正草子』利用には、多くの変形が加えられてもいる。以下、順を追ってその利用方法を明らかにしてみたい。

## 二二、娘の誕生をめぐる

『文正草子』では、長年子宝に恵まれなかった文太夫婦が鹿嶋大明神に参詣し、願い通じて蓮華・蓮の前の二人の娘が誕生する。二人は、順調に他に並ぶことのない美女へと成長する。寛文四（一六六四）年十二月長尾平兵衛版『文しやうさうし』は、二人の娘を次のように描き出す。

かくてとし月をふるほどに。此ひめ君たちの御かたちありさまは。ひかりもさしそふこゝちして。まことに花のにほひもさきまさりてぞ見え給ふ。なにゝつけてもくからず。かきながし給ふふでのあとなどまことにこしかたゆくするにも。かゝるためしはよもあらじ。つねはごせをねがふ御こゝろざしもあり。なにゝついてもたぐひなくめでたくありがたき御さまなり。をろかなる御事ぞなかりける。

容姿端麗のみならず、前例を見ないほどの能筆であったと伝える右引用文は、外見に文才をも兼備していたと語る。時代下って土佐少掾正勝正本『塩屋文正物語』（元禄六・一六九三年以前成）も、容姿と文才をたたえる。

十五と十四の。姫を二人もち給ふ。すなはち其名をば。ひやうそくにまかせて。一はれんげ御せんとつき給ふ。いもうと姫の其名をば。はちすのまへとぞ申ける。いづれおとらぬ御かたち。りふじんせいしがかうがんも、

是にはいかで。まさるべき。御せいじんにしたがひて。ひかりさしそふ。春の日の、かすみをわけてさく梅の、かことばかりの御よそほひ。しいかくわんげんくらからず。

中国の美人の代名詞である李夫人や西施の紅顔にも見劣りしない蓮華・蓮の前姉妹は、詩歌管絃もたしなんでいたとする。

このように、『文正草子』では類まれな美人姉妹を文太が授かる。典型的な申し子譚であり、二人の誕生が文太夫婦の運命を激変させる契機となる。

「老を樂しむ」の又兵衛は、文太とは違って、子宝に恵まれない苦悩とは無縁であったものの、授かった姉妹ならぬ一人娘おきくは、『文正草子』のそれとは対照的に、「一人の娘を持ちしが、手入してからが迎<sup>とてもめかけ</sup>、妾ものに成るほどの器量にもあらず。是喰ひつぶしと観念し」と、親の期待からも見離された存在であった。

『塩屋文正物語』の冒頭は、物語の結末を次のように予祝する。<sup>(3)</sup>

扱も。其後。されば俗にいひならはす。ししやうつたなきしづのめも。其よそほひのとくにより。玉の御駕に至るとはまこと。成かな其ためし。

美しい容貌の娘を持つと氏姓の高下にかかわらず、玉の

興に乗ることができると語る。『親仁形氣』からは、これと対照的な文言を拾い出すことができる。「老を楽しむ」は、導入部分で器量の悪い娘を産んだ母親の「述懐ごと」を綴る。その長台詞を要約すると、「何かの手違いで娘を産んでも、聶の機嫌取りのために費用がかかり損ばかりする。せめて人並みの器量の娘を授かりたいものだが、美しい男の子を授かることはあっても、きまつて器量の劣る娘を授かるものだ」との内容で、『親仁形氣』の語り手は、これを受けて即座に次のような反論を加える。

是一概なる母のいひぶん、世に男子を調法して、其の子悪事をなし、夢にもしらぬ親まで難儀に及ぶ事を思へば、取方には悪女の方が増しなるべし。男の子の玉のこしに乗りて、親・一門うかみあがりし事を聞かず。中より下の町人は、器量の善悪はかくべつ、娘の子には世話すくなし。(傍線、筆者。以下、同様。)

男子を重宝するのが世のならいであるが、色遊びに耽る放蕩息子を想定したか、男子の「悪事」がかかる迷惑を考慮に入れると、器量はともかく娘の方が世話がかからなくてよい。男子の玉の興など聞いたことがないという理屈からは、『塩屋文正物語』の先の引用部との立場の違いは明らかであろう。かたや、積極的に娘の玉の興を予祝し、かたや、「取方には悪女の方が増しなるべし」(傍点、筆者。以

下、同様)と、娘にかかる期待は概して希薄である。

以上、「老を楽しむ」における娘の誕生からは、結末の祝言を予期するのは困難であり、冒頭部分からは『文正草子』の利用に思いあたる読者はほとんどなかっただろう。それと気付かせる仕掛けは、後に出現する。

## 二二三、『武道伝来記』の剽窃と逆転劇

又兵衛の娘おきくは、本庄の嬢おばの世話で、「去る御大名の御家老の屋敷」に、十三歳で奉公に出される。玉の興に不可欠な高家がここで登場するものの、「妾ものになるほどの器量」ではないおきくにとって、この時点でそれは極めて望み薄である。祝言となる結末への展望も開けていない。ところが、其蹟は奉公先で逆転劇を仕掛ける。

先の梗概に記した通り、おきくは野菊と名を改め、奉公した十年余の間に御家老は奥様を亡くす。失意の底にある家老を慰めるべくあまたの美女を取り寄せるが、当人の気を惹くことはついぞなかった。諸氏の指摘が既にそなわっているが、当該場面より「老を楽しむ」に西鶴『武道伝来記』(貞享四・一六八七年四月刊)「毒薬は箱入の命」(巻一ノ二)の文言の借用がみとめられる。

『武道伝来記』では、奥州福島藩の寵臣橘山刑部が妻を産死で失い悲嘆にくれる。そこで家中が、「内談」の上

「色盛の艶女あまた取りよせ」る。まずこの家中取り計らいの件を「老を楽しむ」が剽窃する。次に、十月の亥子の夜の収穫祝いの宴席の件は、『武道伝来記』が詳細を記すのに対し、「老を楽しむ」は割愛する。そして、宴席後に主人——『武道伝来記』は刑部、『親仁形氣』は家老——と、器量の悪い下女との邂逅に至り、長文の剽窃が行われる。本稿の論旨にかかわるところであるので、煩を厭わず以下に両作品の本文を引用併記する。

[A]その跡は、俄に淋しく成りて、東の方の書院に出て給へば、宵は月を見しに、空定めなく時雨れて、軒の松無用の嵐をおとづれ、瑠璃灯のゆらぐを、「誰かは、はづせ」とありしに、野沢といへる女、搔取前して、御意にしたがひ、この灯をおろし、立ち帰る面影、何となくしめやかに、憎からぬ身振り、東育ちの女には稀なるやうに、御心移りて、後帯のしをとらへて、「我に言ふ事あり」と、口ばやに仰せられしを、聞き捨てに逃げ行きけるが、帯はほどけて跡に残り、その身の重ね棲まばらに、あまたの女部屋に駆け込みしは氣うとかりき。（『武道伝来記』）

[B]その跡は俄にさびしく成りて、東の方の書院に出て給へば、宵は月見しに、空さだめなく時雨れて、軒

の松無用の嵐をおとづれ、釣灯笼のゆらぐを、「誰かは、はづせ」とありしに、野菊かいどり前して御意にしたがひ、灯笼をおろし立ち帰る面影、何となくしめやかににくからぬ身ぶり、あづまそだちの女には尋常成るやうに御心うつりて、後帯の端をとらへて、「我にいふ事あり」と口早に仰せられしを、何の御用やら知りもせずして、「もつたない事を」と、にげんとするを、だきとめられしが縁の始めにて、（…）（『親仁形氣』）

波線部に相違点はあるものの、ほぼ後者は前者を丸取りしている。恐らく、「老を楽しむ」は、「毒薬は箱入の命」の「野沢」からインスピレーションを受けて、「野菊」の名を授けたのであろう。のみならず、其磧は器量の良くない娘が高家の家に嫁ぐ逆転劇を用意するために、『武道伝来記』の当該箇所に着目し、剽窃したのであった。

八文字屋本に西鶴作品の剽窃が頻繁に行われていることは、既に指摘がある<sup>⑤</sup>。それも、単なる剽窃ではなく、何らかの改変意図が介在した創作手法ないし操作である点も多くの言及があり、当該箇所もまたその例に洩れない。篠原進氏は、醜女の成功譚によって成り上がる親仁の、「一風変った行状を書く」ために用意された箇所とし、森田雅也氏は、野沢が毒殺される『武道伝来記』に対し、野菊の幸



福な結婚を与える「其積が西鶴作品より逆のモティーフとして引用する、一種の受容方法が認められる」と指摘する<sup>(7)</sup>。

『文正草子』の利用をみとめる本稿の立場からは、右の先行研究の指摘を受けつつも、それが「逆のモティーフ」にとどまらず、「老を楽しむ」では、醜女を登場させ祝言的結末への不安を煽りつつも、『武道伝来記』の剽窃箇所を橋渡しとし、玉の興婚の結末へと導く効果を狙ったものと考えておきたい。つまり、一言でいえば、この剽窃によって玉の興への要件が整備されたわけである。

## 二四、又兵衛の「親仁形氣」

改めて振り返ると、『親仁形氣』は、「一変りかはりたる、親仁どもの形氣」(序文)に焦点を当てた短編で構成される浮世草子作品であった。ここまで、娘野菊(おきく)の描かれ方に注目してきたが、父又兵衛のそれにも目を配っておかなければなるまい。なぜなら、「老を楽しむ」は、誤解を恐れずに言えば、『文正草子』の文太(文正常岡)という親仁の「形氣」に注目し、それを中腕の又兵衛の人物造型に照射した作品であると考えられるからである。

鹿島の大宮司によく仕えていた文太は、ある日突然独立を促される。このエピソードは『文正草子』の諸本に共有される。寛文四年長尾版では、大宮司に文太の正直さを試

そうとして追放される筋立てとなっている。

(…) ぶんだと申てとしごろのものあり。下らうながらしやうぢきにしてしうのこゝろをそらにきとりめいをそむかず。よるひるみやづかひける。あるとき大うじ殿おぼしめしけるは。いづくを何とたづぬとも。文太がやうなるもの又世にありともおぼえず。しかれどもかのものあまりにしやうぢきなれば。ちとこゝろを見んとおぼしめしておほせられける。いかにをのれとしころのものといへども。われ／＼心かなはぬなりいかならん所へもゆくべし。思ひなをしたらば又ま  
いれ。

文太は、大宮司の気まぐれに振り回される形で、言い付けに従い鹿島を離れる。以下、「つのをかが磯」に到着した文太が塩屋で仕事を得るまで『文正草子』諸本に共通する。そして、傍線部の文太が正直者であるという性格も共通する。<sup>(8)</sup>

『親仁形氣』の又兵衛は、「日雇取をして其のひをやうくに過ぎける。中腕の又兵衛とて律儀なる男あり」と紹介されており、文太との共通項を見出せる。

「つのをかが磯」の塩屋に雇われた文太は、焚き木を取るよう主人に命じられ、「たき木こそ日に／＼とりにゆきける。もとより大ぢかなればつねものもの五六人もつぽ

どもちければ」と、甲斐甲斐しい働きぶりを見せ、「あるじなのめならずによるこびて。又となきものに」思われる。主人に塩釜を譲られ暖簾分けを許された文太は大長者となるが、それは正直者にして且つ働き者であった結果もたらされた『文正草子』では描く。

「老を樂しむ」の又兵衛もまた無類の働き者であった。

(1)「とかく本の住家へ歸して給はれ。爰にゐて朝夕結構成る生食を喰うて、晝の上に荒働きせずにくらしては、中く命が続かぬ」と、夜もむらさきぶんのの上にはねず。

(2)「たゞ古巢のはにふへ歸して給はれ。美食を給べたゞあるゆゑ、骨ぐいたみめいわくいたす」と難義がれば、「然らばお慰に、千本築をさせませ」と、俄に高時絵の地築棒こしらへ渡せば、「是く」と悦び、(…)

(1)・(2)共に、野菊を妻に迎えた家老の屋敷へ招かれた折の又兵衛を描く。先述の通り、豕子の夜の契りをきつけに野菊は家老の子を産み結婚する。この展開は、中将と姉蓮華姫が結婚し、都の殿上人として文太夫婦が迎えられる『文正草子』に類似することは明らかである。姉の寂しさを紛らわせるためにと妹蓮の前とともに上京した文太には、宰相の身分が与えられ、すんなりと雲客の仲間入

りを果たす。一方の又兵衛も、「金杉の賤が家の、半分ちぎれたるはなのうれん」のかかった住まいから、立派な家老屋敷へとせつかく移ったにもかかわらず、「晝の上」や「むらさきぶとん」が、肌に合わず、むしろ「荒働き」を所望する。すなわち、又兵衛にとっては労働こそが生き甲斐だったのであり、高家での生活は本意ではなかったのである。文太もまた五六人力の「荒働き」をやつてのける働き者であったが、其積はこの性格に着目し、貧乏暮しと労働に目がない「一変りかはりたる、親仁」である又兵衛を造型したのではなからうか。

両者とも出世の機会を与えたのは娘であったが、その誕生時の反応も類似点がある。文太は男子を授けて欲しいと願った鹿嶋大明神に、「ぶんしやう聞いていかにさしもやくそく申つるかひもなく。によしをうみ給ふぞとしかりければ」(寛文四年版本)、と怒りをぶつける。又兵衛にとってのおきくは申し子ではもとよりなく、自然に授かった娘であった。長者となった文太とは違い、日雇い人足として生計を立てていた又兵衛には、姉妹ではなく一人娘が誕生する。『文正草子』もつまるところ、蓮華姫の結婚が出世の契機となったのであり、妹までは不要とした判断が設定変更の所以であろうか。「一人の娘を持ちしが、手入してからが迎妾ものに成るほどの器量にもあらず。是喰ひつぶし



と観念し、十一、二迄なりやひにそだてし」と「老の楽しみ」本文にあり、又兵衛は怒りこそしていいものの、娘の生誕を決して手放しには喜んではおらず、諦観の内に育てようとする態度が見受けられる。つまり、両者とも当初娘の誕生を歓迎していなかった点で共通点をみとめることができるのだ。

蓮華と中将の間に男児が誕生したのと同じく、野菊と家老の間にも幸若丸と命名される男児が誕生する。ただし、『文正草子』では、四十になるまで子が授からなかったのは、文太夫婦であつたのに対し、「老を楽しむ」では、家老になかなか子宝が恵まれなかったという操作が加わっている。本文は、以下の通り。

度々御部屋へ御入れ有つて、此の上の果報、程なく懷妊して、旦那の満足がり、「四十余に及ぶ迄、子といふものなかりしに、出来した。ずいぶん身を大事に持つて、安産をいたすべし」と、殿の御扶持人医者をかけられ、御祈禱の山伏に、子安の祈りを仰付けられ、月重りて玉のやう成るをのこ子をうみければ、一家中の喜び、幸若丸と名を付けられ、御家の跡目をかしづきける。

波線部は、「四十になるまでむまざる子を」（寛文四年版本）と、文太の妻が嘆く表現ともよく一致する。ただ、遅

い出産と申し子譚の件を又兵衛にとつては娘婿となる家老に充当させたのが、「老を楽しむ」の工夫である。また、『文正草子』では、蓮華・中将の結婚↓文太夫婦参内↓蓮華出産と展開するが、又兵衛は幸若丸出産を機にはじめて家老の屋敷へと招かれる。

招かれた又兵衛は屋敷での生活に馴染めず、「人寝しづまれば、音せぬやうにそつとぬけ出て、庭に荒筵一枚敷きて、裸身付けて、「是極楽」と悦びぬ」と、「一変りかはりたる、親仁」を地で行く奇行を繰り返し、周囲を困惑させたが、「身には小袖をまとひ」、「俄に高時絵の地築棒こしらへ」持たせ、かなりアンバランスな様子ではあるが、元通りの労働者生活を再現すると、「月花にかへておもしろがり」、ようやく屋敷の生活を受け入れる。

そして、高家に昇った又兵衛家族は、『文正草子』のそれと同様に大団円を迎えることとなる。

**A** 御二ところながら御とし百さいをたまちてをはりたまへば。かゝるためしはさらになし。きさききたのまんどころも御とし百廿ねんをたまち給ひてのち。こくらくじやうどのひとつはちすのえんとならせ給ふ。ぶんしやういかばりをこなひたまへば。めでたきくはほうなるらんとうらやまぬ人はなかりけり。

（寛文四年版『文しやうさうし』）

[B] ぶんしやうふうふもふにんして。しまい兩人あいな  
らんで、女御北のまん所に立給ひ、ゑいよう日々に

まさりたり。むかしが今に至るまで。めでたきため  
しに引塩の。けふりのすゑは名にしあふ。なにはの  
御代のせいとくも。これほどこそは有つらめ。千秋  
万歳めでたしとて、きせん上下おしなべて、みな、  
あをがぬ。ものこそなかりけれ。(『塩屋文正物語』)

[C] 一生安楽にくらし、八十八の升搔切つて孫の殿に奉  
り、百歳まで堅固にて、おほくの人に御あんきよ様  
とかしづかれて、大果報の親父、猶繁昌の時にあひ  
て心のまゝの栄花、めでたかりける老の入前。(『親  
仁形氣』)

又兵衛が「百歳まで堅固」であつたのは、一種の慣用表  
現ではあろうが、ともあれ家族の長寿に言及するのは、御  
伽草子系の『文正草子』[A]にあつて、浄瑠璃作品[B]  
はない。これまでの共通点の多さから、其蹟が参考にした  
のは、御伽草子系の本文と見て間違ひあるまい。「老を楽  
しむ」は、『文正草子』とは設定も経緯も異なるものの、  
娘の結婚が身分の急上昇を招く、いわゆる玉の輿譚の枠組  
みを借用して創作されたのである。

### 三、浮世草子における『文正草子』の利用

ところで、江戸時代の『文正草子』享受を示す言説とし  
て、柳亭種彦『用捨箱』(天保十三・一八四二年刊)上之  
巻「草紙の読初」の記事が最もよく知られていよう。

昔は正月古書(かきぞめ)の次に、冊子の読初よめぞめとて、女子は文正草  
紙を讀しとなり。今もある大家にその古例残りてあり。  
此さうし今多く伝ひ、大本、小本、摺板(はんぎ)の数あるも、  
昔は家々になくてかなはざりし冊子なりしが故なり。  
標題にいはいの草紙と書たるあり。はその証なり、と  
古老の記に見えたり。<sup>⑩</sup>

人口に膾炙した記事であり、改めて引用するまでもなかつたかもしれないが、「古老の記」なるものを信用するならば、昔から『文正草子』は、「なくてはかなは」ない、「いはひの草紙」であつた。この認識が江戸時代の人々に広く共有されていたことになる。だとすると、『親仁形氣』の祝言が『文正草子』のそれに由来することに、結末まで読んだ読者の多くが気が付いたのであろう。

本稿冒頭で述べた通り、草子類の最終話は祝言で幕を閉じる約束があつた。その最終話に読者によく知られた『文正草子』をとりこむのは、すぐに見透かされてしまいかねないリスクを作者は負わなければならない。その点では、

「老を楽しむ」は器量の良くない一人娘の誕生、又兵衛が高家に馴染めないといった危機的状況をクリアさせつつ、子宝に恵まれない人物を文太夫婦から家老に変更するなど、配置転換を適宜行い、平板な展開を避けるよう巧みな工夫が凝らされた作品であると——やや鼻肩目に過ぎようが——言わなければなるまい。

種彦『用捨箱』の記事から、『文正草子』を正月の読初とする慣習があったことは理解されるものの、それが江戸時代の草子類の祝言に活用された実態について言及されることはあまり多くはなかった。染谷智幸氏に、西鶴浮世草子作品における祝言の分布を詳細に追及した一連の論考がそなわる。氏は、『文正草子』が近世町人の経済生活を言祝ぐ機能を担ったとの桜井好朗氏の指摘を受け、『日本永代蔵』序章「初午は乗ってくる仕合」の末尾が、泉州水間寺観音で借りた一貫文の借金を元手に大商人へと躍進を遂げた網屋を言祝ぐ文言でしめくくっている点と、本作品が貞享五（一六八八）年正月に刊行されている事実から、『西鶴が『日本永代蔵』以降の正月刊行作品の序章末尾に祝言を置くのも、『文正草子』の祝言性と読初の慣例とを意識していたからであり、自らの草子もめでたい読初の書として読まれることを西鶴は狙っていたのではないか」との分析を加える。『親仁形氣』もまた、享保五年正月刊の浮世

草子作品であるが、『文正草子』の祝言利用は、序章ではなく最終章に置かれていた。「読初」を読者が冊子の丁を開いて最初にあらわれた序章に接する行為ではなく、最初に紐解いた作品全体に接する行為と拡大解釈したならば、正月刊行と『文正草子』の利用が、西鶴と同様にみとめられてよいだろう。

最終章段への『文正草子』利用がみとめられる浮世草子作品は、『親仁形氣』以外にはないものか。論者はこの問題に應える用意はできていない。ただし、上田秋成『世間妾形氣』（明和四・一七六七年正月刊）の最終話「貧苦に身をしぼる油扇の絵」（巻四ノ三）にその利用がみとめられると考える。本話の梗概は、以下の通り。

元武士で浪人となった扇画工の伊右衛門には、姉お瓶・妹木幡こはたの二人の美人姉妹があった。姉は信心深く学問にも造詣があり、妹は相借屋の嬢の影響で遊女を志していた。伊右衛門夫婦は、口入嬢を頼み姉妹を妾奉公に出そうとたくらむ。姉妹の美しい姿の絵図はたちまち目に止まり、諸国の大名から毎日縁談が持ちかけられた。しかし、出家の意志を固めたお瓶と茶屋奉公を懇願する木幡はともにこれを承知しない。ある日、深草の里に観念修行の若僧が無言の大作を行っていた。お瓶が若僧のもとを訪問すると、間もなく二人は意気

投合する。この若僧は実は筑紫の大名萩山殿の嫡男であつたが、出家の志深く出奔していた。偶然、伏見に逗留していた萩山殿の家老伊万里新左衛門が彼を見つけ出し、弟鶴吉が病死し後継ぎがいない旨を伝えた。若君は帰国の申し入れを受け入れ還俗し、萩山鹿之介と名乗った。世継ぎを所望されたのに対し、鹿之介はお瓶を妻として迎える。妹木幡は屋根板屋の楓屋松右衛門と結婚し、伊右衛門は萩山殿より五百石扶持として取り立てられ、めでたく武士に返り咲いた。<sup>15</sup>

娘の結婚が、父親の境遇を一変させ、祝言にしめくくられる構成は、『文正草子』のそれと共通している。

細部にも共通点が見られる。まずは、伊右衛門の娘姉妹が二人揃つて器量が良かったことを挙げるべきであろう。『文正草子』では、男子誕生の望みが叶わなかった文太に対し、「ひたちどの」がいずれ大名高家の妻に迎えられるかもしれないと慰める場面が挿入されているが、「貧苦に身をしぼる油扇の絵」にも伊右衛門が二人を大名方の妾奉公をたくらむ場面がある。出家の志の深いお瓶の造型には、蓮華・蓮の前が数多の大名からの求婚を断るべく出家を志したのに由来するだろう。萩山鹿之介が深草に出奔するのは、『文正草子』の中將がまだ見ぬ恋を募らせ、商人に身をやつして京から鹿島へ出奔する件に重ねられているのだろ

う。

『世間妾形氣』も正月刊行であり、それが『文正草子』利用の動機になったのだろう。先の『親仁形氣』の最終章段と同じく、『文正草子』に巧みに変更を加え、平板な祝言譚に終わらぬよう秋成が工夫を尽くしたと評してよからう。

### おわりに、

従来、八文字屋本浮世草子作品の創作手法の分析では、西鶴作品の剽窃・利用に注目が集中してきた。本稿でとりあげた『親仁形氣』『老を樂しむ』においても、『武道伝來記』巻一ノ二からの剽窃がみとめられるわけだが、それが『文正草子』の祝言に導くために仕掛けられた作者の工夫であつたことを明らかにした。八文字屋本浮世草子が撰取利用したのは、西鶴作品にとどまらない。それ以前の古典作品の世界も重層的に利用したはずである。本稿はその一端を明らかにした。

浮世草子の巻末を祝言で閉じる不文律は、本稿で指摘した作品以外にも『文正草子』を利用した例があつたことを予期させる。今後もそうした実例を収集し、『文正草子』の近世における享受の全体像を明らかにしていきたいと考えている。

※ 注

『世間親仁形氣』の引用は、長谷川強校注・訳『新編日本古典文学全集』65（二〇〇〇年・小学館）に、『文しやうさうし』（寛文四年十二月長尾平兵衛版）は、岡田啓介『諸本の本文翻刻』（『文正草子の研究』一九八三年・桜楓社）及び大阪府立中之島図書館蔵本（請求番号 甲和1117）に、『塩屋文正物語』は、鳥居フミ子校訂『土佐浄瑠璃正本集』第一一九七二年・角川書店にそれぞれ拠った。但し、一部句点を補った箇所がある。

- (1) 国文学研究ノート』37 二〇〇三年一月
- (2) 引用は、広嶋進校注・訳『新編日本古典文学全集』69（二〇〇〇年・小学館）に拠った。
- (3) この予祝は、寛文四年版本をはじめ御伽草子系本文には見られない。
- (4) 引用は、富士昭雄校注・訳（2）同書に拠った。
- (5) 『親仁形氣』に関しては、佐伯孝弘『浮世親仁形氣』の現実感（『江島其磧と氣質物』二〇〇四年・若草書房）に詳細な西鶴作品利用の考察及びリストがそなわる。
- (6) 篠原進『浮世親仁形氣』論（『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』第19号 一九八三年三月）
- (7) 森田雅也『浮世親仁形氣』試論―其磧の方法について―（『東大阪短期大学紀要』第14号 一九八九年三月）
- (8) 『塩屋文正物語』には、「大宮司の領内に。つのおかの文太とて。てんせいしやうじきの者あり。世をわたるいとなみに。しほをやきてわざとなす」とある。
- (9) 『塩屋文正物語』には、この件なし。
- (10) 引用は、『日本随筆大成』第一期13（一九九三年・吉川弘

文館）に拠った。

- (11) 三谷栄一「文正草子と春のことぶれ」（『日本文学の民俗学的研究』一九六〇年・有精堂書店）には、正月の浄めに塩が用いられた点などを原因に挙げている。
  - (12) 染谷智幸「西鶴の浮世草子と祝言（その一）―序章末尾の祝言をめぐって―」（『茨城キリスト教短期大学』日本文学論叢』第十号 一九八五年三月）、『西鶴の浮世草子と祝言（その二）―西鶴織留の成立をめぐって―』（『茨城キリスト教短期大学』日本文学論叢』第十一号 一九八六年三月）、『西鶴の浮世草子と祝言（その三）―『世間胸算用』に込められた祝意―』（『茨城キリスト教短期大学』日本文学論叢』第十二号 一九八七年三月）、『西鶴の浮世草子と祝言（その四）』（『茨城キリスト教短期大学』日本文学論叢』第十三号 一九八八年三月）
  - (13) 桜井好朗「文正草子の成立について」（『日本歴史』一五三 号 一九六一年三月）
  - (14) (12) 染谷智幸「西鶴の浮世草子と祝言（その一）―序章末尾の祝言をめぐって―」では、両作品が共に靈驗譚であることも出典の根拠に揭げている。
  - (15) 『上田秋成全集』第七卷（一九九〇年・中央公論社）所収本文に拠る。
- 〔追記〕『世間妾形氣』「貧苦に身をしほる油扇の絵」における『文正草子』の利用については、大阪大学卒業生山本悠子さんが二〇〇八年度に提出された卒業論文を参考にしました。記して感謝申し上げます。